

「日本写真保存センター」調査活動報告(33)

—地震、津波、風水害など多発する災害ニッポンの記録—

松本 徳彦 (副会長)

ドキュメントとしての写真に多いのが地震、津波、風水害など被災地の惨状をとらえたものが数多い。直近では「九州や北陸地方の豪雨被害」、近年では東北地方を襲った2011年の「東日本大震災」、遡って1995年の「阪神・淡路大震災」など写真による報道が目を引く。

■伊勢湾台風の惨状を記録した佐伯義勝 (1927~2012)

1959(昭和34)年9月26日午後6時過ぎ、超大型の台風15号が紀伊半島潮岬西方に上陸。上陸時の瞬間最大風速は48.5メートル、中心気圧929.5ミリバールで、これは台風の陸上観測では、1934(昭和9)年の枕崎台風の916.6ミリバールに次ぐ記録だった。直径700キロの暴風圏をもつこの台風は、時速70キロという猛スピードで伊勢半島を北上、伊勢湾から名古屋市を直撃、愛知・三重・岐阜の東海地方の人口密集地帯を縦なめし、日本海に抜けた。

愛知、三重両県に暴風雨・高潮・波浪警報がラジオで伝えられたのは、26日午前11時15分。名古屋地方気象台は「最悪のコースで、最も近づく夜半ごろは名古屋港の満潮時にあたる」と厳重な警戒を発したが、風雨は強まる一方で、午後8時過ぎには名古屋市全域が停電し、暗黒に包まれた。夜9時、名古屋市で平均風速34.9メートル、瞬間最大風速45.7メートルを記録した。

この頃を境に高潮による防波堤の決壊、河川の堤防決壊が各地で起こり、海拔0メートルの名古屋市南部の南区地帯に海水が流れ込み、貯木場の木材約50万本

が打ち上げられ、一帯は巨大な流木で家々は打ち壊され、人々はその下敷き、打撲などで死傷者が続出した。この時の様子を綴った文集『町が海におそわれた』(神山征二郎著、学習研究社1989年)に、「黒い海がぐわっともりあがった」海面は気圧が1ミリバール低下すると、約1センチ高くなる。台風が名古屋を通過するころは、950ミリバール前後の低気圧だったから、海面は通常より50センチ以上高くなっていて、強い風の吹き寄せで2.5メートル位盛り上がり、増水した河川の水と合わさって、最高5メートル31センチに達していた」と、巨大台風の怖さが記されている。

この台風による被害は、死者4,697人、行方不明401人と観測史上最悪の台風被害となった。大きな被害を生んだ名古屋市西方の弥富市の鍋田干拓地では今も慰霊祭が9月26日に催されている。この干拓地は秋田県の八郎潟とならぶ国営の大規模干拓地である。

この台風の惨禍を写真家として活動し始めたばかりの佐伯義勝(当時27歳)が被災状況と復興に向けて活動する被災者の状況を、真摯な眼差しで記録している。この撮影原板35ミリフィルム(ネオパンSS)×15本(484コマ)は、名古屋市南区図書館が『伊勢湾台風災害写真集No25-31』として出版並びに展示資料として利活



0メートル地帯に流れ込んだ海水から逃れる住民たち



浮き上がった線路を伝って避難



救援を待つ人たち

用するためのデジタル化を終えたため、写真保存センターにご遺族の佐伯弥生夫人からご寄贈いただいたもので、このフィルムから6点の写真を掲載した。

佐伯がとらえた名古屋市南区周辺の住宅地、中小企業の工場群と開拓地の被災状況と高潮で住まいを失った避難民。救援の人々などをきめ細かく追いつけ、水害の恐怖からいち早く立ち直り、辛抱強く、隣人ともども共助する姿を冷静に描写している。

佐伯は料理写真家として著名であるが、それ以前は報道写真家として木村伊兵衛氏のもとで菌部澄、石井彰、樋口進、三堀家義、田沼武能氏らと修業した。

1953年、石川県内灘村海浜に米軍の射爆場が作られることに住民が反対運動を起こした。佐伯はこの基地問題を撮りに出かけ、射爆場に座り込む乳飲み子を抱く婦人や団結小屋の板塀にたたずむ少年らの姿を克明にとらえ、闘争現場の住民の姿を克明にとらえ発表した。以来報道写真家として、54年「ニコヨンの女書記長」、55年の小児麻痺の女兒と母親との愛情物語「愛の三輪車」を発表するなど、常にヒューマンな眼差しで捉



お棺に入った家族と最後のお別れ



注ぐ水もない洗濯場

えた作品が評価されている。また、57年の立川基地砂川町での組合員と警官との流血事件現場を記録するなど、話題作を次々と発表したことでも知られている。

☆名古屋市南図書館(052-821-1732)では「伊勢湾台風関係の資料写真」が常設展示されています。ご覧下さい。



打ち上げられた運搬船